

学校復帰にこだわらないフリースクール

活動先: 特定非営利活動法人 ぽお

1. 活動先の紹介

NPO 法人ぽおは、半田市にある不登校やひきこもりの方、またその家族を支援する市民団体である。ボランティアや自然体験を通して、「自分は何がやりたいのだろう?」、「なにができるのだろう?」という声と真剣に向き合っている団体だ。

自分でやりたいことを見つけ、チャレンジしていけるような援助をすることを目標とし、子ども達や若者が安心して自分らしく暮らせる場、自分探しのできる体験を、地域の中に創りだしていく活動を積極的に行っている。

2. 当初の活動目的や目標

私たちは“夏休みを一緒に過ごす仲間”になろう、ということを目指に掲げた。子ども達は、肯定的にも、否定的にも、自らのことを“自分是不登校だ”という認識のなかで生活している。だからこそ、夏休みだけでも“不登校”としてではなく、“子ども”としてこの期間を精一杯楽しんでもらおうと考えたのだ。

自分の気持ちを素直に表現してくれる子ども達と向き合い、まずは私たちの中の「子どもたちが“不登校”だ」という認識をなくし、遊び通して“仲間”という関係を築いていくことを目標とした。

3. 自分たちの活動内容

[1日目] 8月16日

午前：宝探し

一番はじめの遊びということで、できるだけ子ども達とたくさん関われる遊び計画した。半田小学校のグラウンドを全部使い、さまざまなところに宝となるものを隠し、ミッションもつけたりして全員で楽しむことができた。

午後：プール

小学校のプールを6人で貸切り、ビーチボールや鬼ごっこをして楽しむことができた。子ども達が普段から行っている遊びの輪に入ることで、この時間で子ども達との距離をぐっと縮めることができた。



[2日目] 8月21日

紺屋街道夏祭

ぱおが半田市の紺屋街道の夏祭りで、フリーマーケットとしてお店を出すということで、私達もそのお手伝いをさせていただいた。ぱお以外にも、NPO 団体が出店していたりして規模は小さいお祭りだったが、たくさんの人が関わりを持てる場であった。

この日はぱおのOGの方が来てくださり、また一段と明るいぱおの雰囲気の中、子どもたちと一緒にお祭りを盛り上げることができた。

[3日目] 8月25日

午前：昭和喫茶

この日は、ぱおが交流のある瑞光の里という特別養護老人ホームでのボランティアと一緒に参加させていただいた。昭和喫茶とは、瑞光の里で行われている行事の一つで、昭和の雰囲気が漂う空間で、喫茶店を開き、お茶とお菓子で利用者の方たちをおもてなしする、いうものである。

ここで、私達が心がけたのは“子ども達から教わる”ということだ。子ども達から教わることで、この場での自分たちなりの工夫や、子ども達自身が自覚する役割について触れることができた。



午後：フルーツ大福作り

ぱおの子ども達のブームがテレビ番組の「時短生活ワイド SHOW!」で紹介された簡単時短レシピを実際につくってみることだったため、みんなでひとつレシピを選び“フルーツ大福”をつくってみた。料理が好きな女の子たちと共に作り始めると、完成が近づくにつれ男の子たちも興味を持ち始めとても楽しい雰囲気の中、協力して取り組むことができた。

[4日目] 8月27日

午前：勉強

この日は一日、ぱおの流れに添ってすごした。午前中は受験生の勉強を一緒にやった。この時私達が心がけたのは“教える”のではなく、“一緒に考える”ということだった。「大学生でも解けないんだ」と思ってもらうことで、上下の壁をなくそうと試みた。

午後：プール・麻雀

2回目であったので子ども達の輪に溶け込みやすく、私達自身も楽しむことができた。

プールの後は子ども達に教わりながら麻雀をした。ぱおの子たちはとても丁寧で分かりやすく私たちに教え



てくれ、私達がやりやすいような配慮も忘れなかった。この頃には、輪の中に自然と笑いが生まれるようになっていた。

[5日目] 8月30日

バーベキュー

この日は6日間の中の一大イベントであるバーベキューを上野間にある「季の野の森」というところで行った。“命の大切さ”を知るという意味で、生きた鶏を調理するところからのバーベキューだった。最初は子ども達も、もちろん私達も戸惑いを隠せなかったが決して目を背けてはいけないということを教わり“命をいただく尊さ”を噛みしめながら全員で準備に取り組んだ。



みんなで調理した鶏を照り焼きバーガーにし、ありがたく頂くことができた。ここいた全員にとってこの経験は、これから生きていく上で決して忘れてはいけないものだったのではないだろうか。

[6日目] 9月8日



午前：昭和喫茶

2回目ということもあり、前回は子ども達に教わりながら行っていたのが、今回は、ばおという集団の中の一員としてボランティアに参加することができた。子ども達と“共に”利用者の方と関わることができ、前回との違いを実感した。

午後：アルバム作り

午後はばおに帰り、最後の時間を楽しんだ。今までの写真を見ながら、「こんなこともあったね」など、思い出に浸りながらアルバムを制作した。振り返るとこの6日間はとても濃いものであり、遊びや、学びを通して、ばおの仲間になるまでの過程がアルバムという形となって残すことができた。

4. 活動における課題

私達が課題としてあげるのは「不登校児童をどのようにとらえるか」である。事前訪問の時点で代表者の方から、“子ども達を特別視しないでほしい”という風にアドバイスをもらっていたのにも関わらず、心にどこかでそのことを気にして、言葉を選んで接していた。時間が経つごとに、その意識は消えていったが、私達がそのように思っていたことは敏感な子ども達に伝わっていたのかもしれない。

そのような課題を踏まえてスリースクールとはどんな場所なのか、どんな人が利用す

るのか、またどんな方針で活動しているのかななどの事前学習不足が原因なのではないかと考えた。

5. 活動を通して学んだこと

この活動で最も学んだことは学校が全てではないということである。フリースクールや不登校が認知されつつあるが、教育というどうしても学校というイメージが強い。しかし、ただ学校の枠から出て学んでいるだけである。学校に行けないことが「負」ではなく人に会ったり経験を積みなかつたりする環境にすることで「負の連鎖」を生んでいる。ばおで活動する以前は不登校児に対して私達は何ができるのだろうと考えていた。活動をしていくうちに不登校の壁を作っているのは私達の方だと思った。

また私達はこの活動でいくつかの企画を立て結果的には成功させることができた。しかし企画ができたというのは形であって、企画を通して私たちや子ども達が何を感じたかが大切であると分かった。他の活動先であれば、みんなでこれをしようという企画になっただろうが、ばおはみんなでということにこだわらなかった。企画に関わらなかった子ども達であっても話を聞くだけでもいつもとは違う世界が開けて実は関わっているのだ。今後このような機会がある時は企画の内容についてばかり考えるのではなく、自身が感じたことや子ども達の変化に視点をおいて見ていきたい。

6. 活動先への提案

ばおは他のNPO法人と異なり利用者を集めることが難しい事業を行っている。実際活動時は、半田市在住の子どもはいなかった。市役所にばおのパンフレットは置いているが、それをばおを必要だと思う人が手に取って来なければいけない。ホームページやブログがあるので情報発信をしていくことが大切だと思う。また、ばおに通った後に学校復帰する進学を考えている子どももいるので学習支援ボランティアの受け入れがあると良いと思う。子ども達にとっては学習機会と外部の人と触れ合う機会の提供につながるだろう。

7. 今後の研究テーマ

不登校をサポートするNPOを中心に研究を進めたいと考えています。

以下は参考文献です。

田幡秀之, 2007, 「学校復帰にこだわらず」不登校対策 ●フリースクールと連携 1
年—神奈川県教『内外教育』(5721), 6—7

岸本幸子, 2003, 「NPOが担う公共サービスの現状と課題—不登校をめぐる(特集新たな公共経営と民間活用)」『地域政策研究』(25), 30—37

奥地圭子, 2003, 「不登校をめぐる状況と課題(不登校の今を考える—子ども、NPO、教職員、それぞれの視点)」『教育評論』(677), 10—15